



皇大  
W  
911.157  
Ka  
0

62263

911.157  
ka



享保六年二月三日

靈巖院法皇御着到

藤川百首

作者

鳥丸大納言光榮郷

冷泉中納言為久郷

夏海早春

光榮前為久後下倣此

相坂乃山海たえとる春風も宮北小川こころあれて  
ぬぬとしてたえこころ乃政あれや宮北小川あはれ村消

湖上朝夜

鏡山あきらむかのくときめかすも志りのうさ記



あさうす花後の志神さうへう海をさすれはひらふ山を

霞隔遠樹

しそ花後みち未ぬ一むれは海あさうへる乃へる松  
い川とえをねもいつくかすこきささき也ふくと一む

四籜中々学

か〜へふふぬ花山の未所もねお母のう〜ひすの巻  
学れなくるうら死乃都々 事同 ち〜あふひ乃志く人費ん

隣家竹学

中垣のまちる花竹は学巻も行くま〜はるをけう〜ひを

くそ水のこ枝はは〜して竹垣の乃さてん成うこひをの巻

田辺若菜

あせは〜ひ竹やこ〜れあ花ごもい〜ふみ〜れい〜る摘  
よふつむい〜あや竹小山田のひは〜く〜ちた〜ん

花介弥書

子日や〜花りの流し〜う〜あて程消うその花への志書  
春さあ〜空へ〜あ〜清うその言れ花書の花れ細みち

山崎梅花

けや〜て程立ぬま〜ん花の白ひか〜う〜山乃志〜書

身もたぬ社の香あれやけ東人のうへへ山海より折れえ  
梅意取風梅

園の戸もさうして表取のそ風梅もふく雲うよ枝  
伯州風もさへいらぬ梅もふくもぬやとりもけさふを

水辺古柳

朽のこふ川さ此柳もえそきて水のみとりもいつかへふを  
あかこむかぬ庭に古柳いつう程どもそふをつ

雨中待花

程もぬれぬめこのや、そてはわゆる花の枝のそぬ

海えてし花るところも海ぬのそくわゆる枝のそぬ

花にぬ人

花もぬればこ海ぬれささりし花ぬへあぬぬへのあ乃本  
昔もふりりおそかりとハ侍衣立ちあぬ花のあ庭も

幸守山花

山嶽嘆をひさし孝つきかぬらわよお花をさ  
傷かくこさるにさ花山をれ尾上れささくもあつくも

暖庭花

ちさゆくささるし新ぬ庭のそも悔さ花れぬさ花を

きこりて家指とくさるる志のちみ花ちる庭そえをこり  
故の夕景

渚と川花の本は乃夕暮ふかへはわらう古川のそ  
何人のあまとも何きく者のふさゆりへ交その夕暮

河上春月

春月川を流すにせ交入てそあま波のそれ月を  
それあまのこなれて久この中を川よかむ月を

深奥海

明の程名流ううも重とそやあまくこれる直ちん

あはれこころをそ春は序まそあま記まいくくれ

藤巻随風

あをいさあま風れ吹く小籠でもうす池のあ波  
風あ又あわくあ者の花うろねともあまおむおう

栞迎歌

あして風もつれ山吹のむいづれはれうきそ  
あらうこころえそ山吹の花さく里れあの前そ

舟中春景

あられゆく小籠の程うそあまのいれをいさこころ

たまごをいそ<sup>ホシ</sup>中津永にありしは<sup>ホシ</sup>に<sup>ホシ</sup>波<sup>ホシ</sup>

卯花隠詠

うへて何かれわれや<sup>ホシ</sup>あま<sup>ホシ</sup>お<sup>ホシ</sup>花<sup>ホシ</sup>か<sup>ホシ</sup>福<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>わ<sup>ホシ</sup>い<sup>ホシ</sup>ね<sup>ホシ</sup>  
花の名れ<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>記<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>か<sup>ホシ</sup>福<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>わ<sup>ホシ</sup>ぬ<sup>ホシ</sup>ま<sup>ホシ</sup>て<sup>ホシ</sup>嘆<sup>ホシ</sup>ら<sup>ホシ</sup>ん

初支那

きつ<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>か<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>な<sup>ホシ</sup>し<sup>ホシ</sup>ふ<sup>ホシ</sup>し<sup>ホシ</sup>ら<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>月<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>長<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>初<sup>ホシ</sup>色<sup>ホシ</sup>  
この<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>も<sup>ホシ</sup>ち<sup>ホシ</sup>よ<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>ま<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>て<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>郭<sup>ホシ</sup>

山家郭

葉の<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>も<sup>ホシ</sup>ち<sup>ホシ</sup>よ<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>ま<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>て<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>郭<sup>ホシ</sup>

かへり入山<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>志<sup>ホシ</sup>難<sup>ホシ</sup>み<sup>ホシ</sup>や<sup>ホシ</sup>こ<sup>ホシ</sup>よ<sup>ホシ</sup>出<sup>ホシ</sup>ぬ<sup>ホシ</sup>人<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>ま<sup>ホシ</sup>

池畑菖蒲

菖蒲<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>こ<sup>ホシ</sup>か<sup>ホシ</sup>池<sup>ホシ</sup>や<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>座<sup>ホシ</sup>し<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>ら<sup>ホシ</sup>ん  
池<sup>ホシ</sup>水<sup>ホシ</sup>す<sup>ホシ</sup>む<sup>ホシ</sup>も<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>や<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>福<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>朝<sup>ホシ</sup>宗<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>や<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>

宋居致遣火

宋<sup>ホシ</sup>居<sup>ホシ</sup>致<sup>ホシ</sup>遣<sup>ホシ</sup>火<sup>ホシ</sup>  
夕<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>ま<sup>ホシ</sup>い<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>み<sup>ホシ</sup>え<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>う<sup>ホシ</sup>か<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>乃<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>た<sup>ホシ</sup>く<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>な<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>致<sup>ホシ</sup>遣<sup>ホシ</sup>火<sup>ホシ</sup>

芦橋

か<sup>ホシ</sup>ほ<sup>ホシ</sup>つ<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>さ<sup>ホシ</sup>し<sup>ホシ</sup>る<sup>ホシ</sup>は<sup>ホシ</sup>い<sup>ホシ</sup>あ<sup>ホシ</sup>る<sup>ホシ</sup>者<sup>ホシ</sup>と<sup>ホシ</sup>や<sup>ホシ</sup>花<sup>ホシ</sup>毎<sup>ホシ</sup>ち<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>れ<sup>ホシ</sup>の<sup>ホシ</sup>な<sup>ホシ</sup>を<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>り<sup>ホシ</sup>ん

元もそぬるのいれおれり神とそねと句あさち花

杜み月毎

浮きに杜の名おの柏木の葉とさそおみ月毎の比  
了苗とる深田の杜はらうら繩打とへおさぬみ月毎の比

神夕夕及州

夕夕言むてあまそは家とほしてらり此名神程あつま世ハ  
あひまこかちぬ神への名あそ秋とあささ夕夕れの言

洞彦堂史

埋本のすくねてはて花堂とゆうさひやぬらさよけ

あいはりといまてあそ堂とや冬のおのふささこハ一託

坊路夕立

け里ハかとおく晴てかち人のいさとさうあへぬ夕立の毎  
詠あやそと坊路夕立とちてお祭夕立れ毎そ何とさ

初秋期風

期あそ記今うり智れあひあもちあ一也おの秋の初風  
一也あちうあはほさうあ吹そめてまこさああほぬ秋れ初風

閏月七夕

今年たあ後の文月記かことあそを遊遊かさぬよ天の川あそ



一年とあまそふちまの日はかきかき文月早やうらん  
 野亭夕秋

夕暮れを記さくし世の夜は一段の若りてらん  
 秋の世の尾記りいかなすといらん秋の家は夕暮へ

江辺曉萩

泊舟つ支ふ記江の波は色そくく記萩の上の舟  
 ぬこの風をばまらぬ江のちかき波よそく記萩

山家初八

せと秋もあつとまふと海もぬ方の水張の山家初八は夕

任人の衣きうふや山とい麻れこころも一いさねん

海上待月

幾千里もと浦の夕波舟にい月れ出しかそま待  
 亦も家こ記つていむ初田れ系をせつうれ月をいさふ

松乃夜月

月いひつま記のこの夜う松のまれちのいさふひのき  
 木のちもう記いれく松乃世さあ記まれやち砂地の月

深山見月

ちくちくあくらぬけいさあ夜れ月みちさあ山家見月し

夕の暮しはぬ山は元月も明るまゝくかゝるに  
よふ家映月

百葉此家や風のつくりなれやん世人の月を  
清らな花をさ庭の月をさ月をさなれぬまをへんれ

冥海懐月

かこふてもと龍とよ板ひさあきて冥海の秋のよの月  
龍とよしを冥とよ月れはてとえあはすまの浦波

唐色夜友

う紀秋におかしの友あれや福ぬまをさつら棹唐の都

けれと志なく福きたる秋の友れう紀さかゝぬりしは

田家持衣

守る福てかりやま紀秋の思吹福の雲に衣うつる  
初おの思への子田秋をこひりあは福や衣うつるん

古渡秋意

秋はなれぬぬいも立るあや川をかささう流の持娘  
あはさ川初とせの雲もむくあなれあはむ淀の川波

秋風海陸

あらしり花もさなれ秋の思なかり風のあとりとれ

こころ

ふちを海一本たおもは葉ひらくうてのこ勢登迎は秋風

離下す虫

鳴る涼いひつまる紀の長きともあにいづむら虫のきこ  
もあちうふまう紀もあつてもあはりの内かへそぬ虫のあつこ

つゆふ浮水

かろ涼にそきてらん立田川つらもみちハ中もたんじ  
ぬそらん流もあまん伊ごとむらぬれもみちことつ初

山中のふ

山姥のふふとこちれもみちせふてあしかのあや深らん

林麓ふえりしをささぬくのあふはくせうかく山の秋

家底橙花

あふちくをわき家此伊はあふ秋くこれの朝うかのをれ  
うつりふやうてをわき朝鳥の花もつぎあくか、うゆあ

水辺菊花

うきあちくうつせえれあふ秋の星川辺の菊れ下あ  
あふれ花ちぬも波のあさひ水匂ひやさそあ山川のあ

秋情考秋

あしあともあふ秋あふとあふあひつせは進ふつし

此秋と行はるる夜のむら寝むふもさ即ちぬの月  
初冬すぬ

ゆらぬれぬ世にそとぬぬといふうやのやまにそと  
りふ交ふ冬をそこの初冬に初もすりあふふいといふ

初冬すぬ

深しきぬれと又おやちりり木はにいふくむまへ  
あつてうよほのおの下をよとやもまはぬぬやちるむ

屋上すぬ

くれ竹のうらふあぬ花のむとあはれ玉は色そと

むす苔の得らすくお記まこのぬふかきそくりの案せそ

古寺初雪

夜のふとれをきりかりはら山とほりあさのうらちも家の始  
るはの神のゆきとら流て初雪おぬ<sup>おぬ</sup>あもちる

庭雪厭人

いせやとちあおこふ人れりあ人がさ庭のあつた  
庭れ向ふ雪れあちりあはいいん余初とたみ

海辺松雪

指おもからう波うとちるかの雪ありまう松の松を

浦たよりをきてこゝれし 澄ねのちもれよんぬき 雲は下は  
水口をきき

延喜の位やもあらし 水江の言はれぬかこゝろ 雲の朝風  
難波江や松木やきき 雲ありくかりやくこやの言はれぬき

湖上千鳥

うねきこゝあらし 田の浦川もくさきとあくも  
そ 秋の尾花指きをまの浦たつづの 床もあき  
きこ夜ぬき

弘き月も羨夜も ぬれお夜文ゆく ことれつと

いほとあけいし ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

柴草洞水

松木にせられてこゝろ 谷川もちやあこの くれいれき  
埋木れきとぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

初春跡意

あほりす道は ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
あつちのぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

波声ぬき

いれぬぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

かこころの人もさくやとやうぬすこーのきびとひもく

忠親歌

昵垢同し本眼字親近也

ちうすあふちひの家れあふしうらんあれもくからし  
みされーのよひと中に川あてかふよ眉のいさうせら

初不舎意

人程うら田の杜のみーち縄なひくまそあやあそいのむ

福交こともいつまおほきき初川をわあせのちうーさ

旅宿逢意

あれらとが尻抱ふるす年あもあわたい初のもも  
あう

いさくふりぬ丸初の旅衣かごぬ床れ家おを不まん

兼厭曉意

今中いとも初その障あうあつちん色いうー  
ああふのあにせれとあつせいさ境といまはわ初ん

ぬほ書意

別取のう記をかこにいあ初とやきさういその記もあせぬ  
けまにかさあんとあられー名あいらあところあもあま

遇不色意

経ふ又むすおれあ下紐のちあ一敷とつけてるらん

むらきこえのぼの二夜もあそねうらみと神めをよ  
賢経年意

賢一とまつとせまのさころみかいつらと申年と経母  
かもしのいのちあつらんふりき替のそねらうり申

疑古傳意

このころもいつもほしといふも程一すちおえそあたまの  
ころと申たのこてそい傳しましてもあつたそれものあ

返事増意

傳えても程あれそふ候かう記あつたのあをれいへ申

一平おかしやそのあれさえあつた序のかた程まつは  
被厭賤意

うしあ方あつた如の延きあつたはよたつたあつた人  
いらるれわざよあつたの身ごつたあつたかこいんたつた  
途中賢意

わまをれあつたの井れおとらるのゆくよあつたあつた  
あつたあつたのゆくよあつたあつたあつたあつたあつた

従川飯意

栴の戸れさつとあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ちりぢりもあはれにせぬあはれにわづらひし  
亡心任取意

いふやうに又といふらんつれなきともうらん人のすこぶ  
一首願

依意初男

初男のうひやあつんだくへてあはれをよそひのちあつせ  
はきあつや神もあつん意をてはあつてといのう合事

傍遠路意

浦とぞ傳へむ風の信るゑこれとくつやう起す朽あん

中平あまういやそてんや井後のもうち死母よのあはれ

借人名意

う一人かりの名をあなひくとも我とあつてかひあつん  
らその名もあつてこひあつれを井後まきかたれ折

後不知意

後不知意の末れあつてこひあつれとあかかけてあつて  
人いそのれあつてあつてあつてあつてあつてあつて

互恨後意

つぎとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



うたかたごとくかこしをてはたこといそそもいそて終り  
暁文雅堂

暁の暁とこをひて鳴きハ泣くふへまのふちいそそ  
鳴きそ又かたつに泣のまれあふえはくあふれまらそ

雨書松風

又書ハ淋しきまに泣くて夢醒ふも仙の書の下ッ勢  
まられ入れぬのまの松風とや風のまられまららん

雨中緑竹

は緑もくもみもりそふ宛れ竹の烟のまらぬおたひあて

ぬくろ新瑞をかあふれ竹のみもりあそそはくまら

浪洗石苔

苔衣いりうろき浦あこのまかひまぬくあふれいそ母  
かろくろ波いり石ふむす苔の中れいそぬき衣しして

山待月

たえあてもまるとあそそや林扉ふらとのまら月を恨む  
久はれ岩戸出づ月をまらつあまらつ天のかくやま

山中流水

未をくいく岩扉ふらとまらまられういのまら流水せ

春の川の流れもいさやあつきの多き川にたたくの流るる

河水流流

神風やこもる川の流れこもるあふれ流あつり光  
もろこしあふれあふれにみし川をゆくそあつ代の例なき

春秋物抱

花もつておぼふにうきを春秋の神にゆきせみちをあれぬ  
春秋の神へのちさくらにみちをゆくあそふもろ人

夏路の客

くれぬるよ夏路のむと夏路の物もやまをいそぐ旅人

ちあむらち人さそれ山あつて物もつらきとくくの園

山家夕嵐

春つとそねつちそと山里の夕嵐ひまあしとそく  
夕暮のいとすまたる戸ひきもつたのほろたふん

山家人稀

山家ころ候あつて山人をかおそぬあくの影れあつち  
とあ人のなれあつてと山里のうき世おこむとをさつと

海路眺望

浦とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いふもをあるやこほり取りまてみさしこのうへはさ

月霧中友

とそく出る乳流つけてる花こよも友いありあき月  
これ又旅程こよもたき出る花のりおほ送る月あ

旅宿夜雨

あつらふ川辺の若れおのるみ月とわさして程もつ  
あつらふ川辺の若れおのるみ月とわさして程もつ

海辺曉雨

海へはき山つたのくとみさつてあつらふ

横やれつれてさゆり流流あつと送ふあつら浦あり

寄る友に書

たむふも衣をぬき人のせれつてみるおつらふさつ  
何事もせわもる記とてえいいせつての所きたらん

寄る友に書

和歌の浦のむげりさつらわあかくふふらららとせし  
教ふつたけあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

寄る友に書

何事もあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

記し書もあつてとやうな山本お同一多ひのてはをじ

逐日懐旧

今も程々の若川此迄とらてたはをりこといふめいみへ  
りふまにあれあうとる引そあふむと頼まらり

社記祝言

任の江やさふらねのことばを君印多世とこ社とちし衆  
八百といふ此社記言多世といふまことと復もさるる



